
斬龍黒牙の短編集

斬龍黒牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

斬龍黒牙の短編集

【Nコード】

N7351S

【作者名】

斬龍黒牙

【あらすじ】

作者による作者のための作者の適当に書いた短編集小説。

敵のアーチャーの毒矢を受けたその夜。

「苦しい……キャスター。水を……キャスター？」

先ほどまで自分の近くにいた彼女がいない。

（あいつどこに行ったんだ？）

そう思いながら、水を飲もうと起き上がると、どこからか、変な音が聞こえた。

こーん

こーん

こーん

（何なんだ？この音は。）

俺は気になって、重い体をその音のなっている場所に向かった。

「よくも、ご主人様を殺そうとしたな…あの糞緑…絶対許さないんですからね。」

そう言いながら、藁人形に釘をさしていた。

丑の刻参り。

呪いの一つで、丑の刻に藁人形に呪いたい人の一部を埋め込んで釘を打ち込む。ただそれだけの呪いなのだが…、キャスターは必要以上で殺気だっていた。

「……………」

俺は何も見えない。

そう自分に言い聞かせて、この場を後にした。

翌日

保健室で治療を受けていると、申し訳ないと、ダンさんが謝りに来た。

なんでも、このようなことをしたアーチャーの宝具を破棄したらしい。

「そういえば、ダンさん。」

「なんだね、少年。」

「アーチャーはどうしたんですか？」

「ああ。なんでも、今朝から胸を押さえていたよ。たぶん、セラフのペナルティーだろう。」

「そうですか。」

俺は心の中で、ダンさんに謝った。

ちなみにセラフからはペナルティーもなかった。

F a t e / E X T R A S S 「狐の祟り」(後書き)

確実にキャスターはアーチャーを呪い殺せますよね。なんたって、キャスター(魔術師)のサーヴァントなんだから。

決勝戦が終わり、あとは聖杯を貰うだけになったのだが、彼女に今この言葉を伝えておかないといけない気がした。

「玉藻、ちょっと良いかな。」

俺は自分のサーヴァントである狐耳の少女、【玉藻の前】に尋ねた。「なんですか、ご主人様？急に改まっちゃて。

もしや、俺の嫁宣言したから、そろそろ私と愛を…

キヤーーー」

また始まったか…

玉藻はどうもPinku In Ranなんだよな。まあ、可愛いから見てて楽しいけど。

「玉藻…、今回は真面目に聞いて欲しい。あと雰囲気ぶち壊し発言禁止。」

「うう。今日のご主人様いつになく冷たいですよ。まさか、別れ話なんですか！？」玉藻はそう言つと、目に涙を浮かべ睨んできた。

「全然違うから。とにかく、教会に行こう。」

俺がそう言つと、玉藻は????となった。

「おや、ようやく来たかい。」

教会の扉の前にいた青髪の女性、蒼崎橙子さんと、赤髪の女性、蒼崎青子さんがいた。

「すみません、橙子さん、青子さん。無理言つて…」

「良いつて、良いつて。どうせもうすぐ出て行くことになってるんだし。」

「それにな、二人つきりでこんな場所を貸して欲しい。と頼むからには、お邪魔虫はどこかに行った方が良いのだろう？」

青子さんは笑いながら軽い口調で、橙子さんは意味深げに笑い、こ

ちらを見た。

「すみません。すぐ終わりますから…」

俺は謝りながら言うと、二人は笑いながら、早くいきな。と言ってくれた。

「ご主人様？ いったい、このようなところで何を…」

玉藻が尋ねる。

俺は玉藻に向かい合った。

「玉藻…。私はあなたを妻とし、一生幸せにすることここで誓います。」

俺が顔を真っ赤にしながら言った。

「…………ご主人様…。」

玉藻も顔を真っ赤にしていた、たぶん言葉の空白に自分が落ち着くように、頭の中で騒ぎまくっているだろう。

「玉藻…」

俺は優しく彼女の名前を呼ぶと、彼女は「はっ！」としてこちら側を見た。

「…………ご…ご…ご主人様。私は…あなたを夫とし、あなたに尽くすことをここに誓います。」

玉藻も少し涙ぐんで言った。

生前、好きだった人に裏切られ、殺された玉藻。

だけど、今は嬉しくて泣いている。

そんな玉藻に俺は優しく、夫婦の誓いの最後をした。

Fate/EXTRA SS 「二人だけの結婚式」(後書き)

フエイトエクストラのキャストのお話。

Pinku In Ranが無くなれば、きっと良き良妻賢母になりますね。

あっ！でもそれだと彼女らしく無いかな？

F a t e / E X T R A S S 「呼ばねーよ」

私の名前はフランシスコ・ザビエル。

一応魔術師で現在月で聖杯戦争をしているのだが……

「だから、なんども聞いているだろう。君の名前を」

「だから、フランシスコ・ザビエルだって！」

「嘘をつくんじゃない！」

現在自分のサーヴァント「アーチャー」に文句を言われています。

「何度も言うが、私の名前はフランシスコ・ザビエル！わかったか
！」

「ふつ。そんな有り得ない嘘が通じるとでも？」

今の発言に俺はキレた。

「貴様に一度地獄を見せてやるのか！」

「何をする気だ……」

アーチャーは顔色を変えながら言うが、もう知らん！

「令呪よ！」この分からず屋をなんとかしろ！」

令呪を一気に2つ消費して願いを叶えた。

後日、かなり素直になったアーチャーがそこにいたとかいなかったか。

F a t e / E X T R A S S

「呼ばねーよ」(後書き)

名無しの森に御招待！
そんな私のネタだよ。

オリジナル 闇夜に浮かぶ影

(戦い、戦い。)

永遠と戦い続ける毎日になんの意味があるのだろうか。)

闇夜の影の中を人影は敵の追撃を交わしながら走る。

闇にはただただ、漆黒の軌跡らしきものを残しながら、消えていく。

「奴はどこだ！」

誰かが銃を持ちながら叫ぶ。

「くだらん……」

(人も人として生きること……)

人影はただ目的に向かって走る。

その姿は一瞬光に照らされたかと思うと、また闇夜の中に消えた。そして……

ザンッ

一瞬にして銃を持っていた人の首が空中に舞った、そして人影はまた闇夜の中に消えた。

闇夜を駆けて消える人影はただ自らを「闇」と名乗り多くの人を暗殺してきた。

しかし、その人影はまだ齡^{よわい}20も云っていない少女だと言って信じるものがいるだろうか。

少女の名は「明華」姓は無く、「華のように可憐で、明るい性格であるように」と願った両親はもういない。

明華の両親は政治家達に秘密裏に殺されて、その娘である明華も死んだことに成っているが、少女は奇跡的に一命を取り留めたのである。

明華は自分を殺しかけ、両親を見るも無惨な肉片に変えた犯人に復讐をするために、独り鬼となり生きてきたのである。

「父は言った。母は言った。人を殺すなど、しかし私は今でも傷が疼き、あの日のことを鮮明に思い出します。」

明華は闇夜に隠れながら独白すると、また走り出しました。

少女は闇夜を駆けます。

ただただ、怨みを晴らすために・・・

その後

彼女が復讐をできたかどうかは分かりません。

しかし、街ではこんな噂が流れ始めました。

新月の夜には闇夜から鬼の影が現れ、老若男女すべてを殺しているらしい。

G O D E A T E R 「主語！主語抜けてる！」（前書き）

会話をべしおこなう。

GOD EATER 「主語！主語抜けてる！」

これは俺とリンドウさんとでアラガミを討伐し終わり帰る時に起こったことだ。

「ビールが恋しいな。」

「もう（アラガミ）はでてこないだろうな。」

「えっ！」

おい、（ビールが）もうでてこないってのは本当か！

「えっ？」

まあ、多分本当ですが。」

「な、な、なんだって！！」

なんでそんなことがわかるんだ！」

「周りをよく観察すればわかりますが？」

「（くっ！ならサクヤに連絡しておかねえーと・・・）すまんが迎えが来たら呼んでくれ。」

「あ、了解。」

このミッション終了後、リンドウさんはサクヤさんの部屋で小規模

飲み会があったそうなの。

ちなみにおのち、リンドウさんはビールが次の配給でも出てきたので少しご機嫌だった。

狐と少年の物語 詩詠いが紡ぐ歌（前書き）

最近、狐と少年の物語の続きを描いていると思いきや、浮かんだ詩^{うた}です。

ちなみにメロディー付きで自分は口ずさむので、少しおかしくなっています。

狐と少年の物語 詩詠いが紡ぐ歌

少年 狐に恋をしたよ

狐 少年に恋をしたよ

それが 物語の 始まり……

少年 神様 願い事よ

人と 異なる恋をしたい

何度も 神様に 願ったよ

狐 神様に願い事よ

誰か私だけを愛してよ

何度も 神様 願ったよ

少年 狐に出会ったよ

迷い 野原で出会ったよ

狐 少女と出会ったよ

狐 少年と出会ったよ

迷い 野原で出会ったよ

不思議 少年と出会ったよ

少年 狐に恋をしたよ

狐 少女は可憐でした

少年 狐を守りたいと

何度も 何度も 願いました

狐 少年に恋をしたよ

少年 優しさに嬉しかった

狐 少年に 愛して欲しい

何度も 何度も 願いました

狐 少年 悲しみ 喜び 怒り 愛よと思いました

少年 狐に願いました

狐 少年に願いました

二人 同じに願いました

どうか(どうか)(ふたり)(ふたり)(ともに)(ともに)歩みたいよと
願いました

それが 物語の始まりでした

これは 二人 狐 少年の恋物語

それは 二人の奇跡語り

狐と少年の物語 天照のその後（前書き）

はい。私の書いている物語の『狐と少年』の天照さんがなかなか出ない
ので、あの後なにをしているのかを、書きましよう。

狐と少年の物語 天照のその後

誰かの声が聞こえる。

天照は声が聞こえた方とは逆に走り出そうとした時……

【私の好きなのはあ・な・た】

どこからか音楽が聞こえてきた。

気になった天照だが、しゃべり方や声の質から誰かわかり一目散に逃げ出した。

その後ろでは……

「スサノオ……」

「えっと……人違いです……」

「なら、こっちを向いて喋ってくれませんか？（黒笑）」

「（こええええええええ！）えっと……私はずかしがりやなん
で……」

「あら？じゃあ、なんで舞台上の上にいるのでしょうか？」

完全に理詰めにて一人のアイドル的な少女を押さえ込もうとする、
巫女服の少女がいた……

この少女達の名前は「スサノオ」と「ツクヨミ」と言っただが、こ
の際おいて「作者！頼む姉上を」あら？自称売れっ子アイドルさん。

.....

「気のせいですね。」

そう言うと再び仕事（内職込みで）のために、足を速めた。
しかし・・・

「安いよう！なんと今なら茄子が一個68円だ！！！」

ピキューン！！！！

天照は気付くと大量の買い物をしていた・・・

サモンナイト2 鬼妖界の契約者(プロローグ的なもの)(前書き)

好評ならちゃんとシリーズかする。

サモンナイト2 鬼妖界の契約者（プロローグ的なもの）

俺は変な夢を見た。

昔の様な日本に鬼や妖怪が沢山いる世界に言っであちこち見て、だ
けど向こうからは俺は見えないらしく、まるで透明人間にでもなっ
たみたいだった。

そんなこんなでその世界のあちこちを見て回っていたら急に竜が現
れた。

「貴様、我が世界の者では無いな！いったい何処から現れた！答え
ろ！」

「えっと、日本ってどこから来ました。詩峰司しほつかみと言う者です。」

俺はどうせ夢だから嘘を付こうと思ったが、竜の目から虚偽の発言
をすると殺されると思い、一応本当のことを夢の中の竜に答えた。

「にほん？それは何処の・・・いや、貴様。名も無き世界の者か。」

竜は何か一人ごとを言いながら考えてるらしい。

そうこうしてる内にどうやら目覚める時間らしく俺の姿が薄くなっ
ていく。

それを見た竜は慌てて俺を見た。

「貴様・・・帰れるのか。」

「どっかいびつとっ？」

「いや・・・もしやもう一度この世界に来るかも知れぬから私のことを貴様に教えよう。我は【鬼妖界の王^{エルゴ}】！」

「名前は？」

「さあな。もう何千年と生きているんだ。とうの昔に忘れたわ。」

「そうなんだ。なら付けてあげるよ名前。」

サモンナイト2 鬼妖界の契約者（プロローグ的なもの）（後書き）

さて需要があるのか・・・

ちなみにもし連載するならこちらはPSPから投稿していきますので、短く連続で書きますのでご了承ください。

なおシリーズ化希望の方はコメントして下さい。

オリジナル 闇に立ち向かう闇

闇があふれるこの世界

誰しもが助けを願い生きていた。

それはその世界に生きた一人の起源覚醒者の物語

全身ボロの布で姿を隠す一人の人がいた。

彼の名は

その名を知る者はほとんどおらず、この闇の世界でも狂気の魔剣士として一応有名ではある。

しかし彼の姿などは分ならず唯一使う武器が剣、または魔法の類の剣に近いものであることは死体の傷から見てわかっていた。

それ以外は不明である。

言わば都市伝説のように扱われていた。

「結構たおしたな。」

彼は闇の世界にあふれる魔物達を倒していた。

魔物だけでは無い、魔人や人間、拳げ句の果てに神すらも手に掛けた者なのだから。

「ねえ…」

彼に一人の少女が近付く。

「なんだい？」

「もう私のために無理しないで…」

少女は泣きながら彼に言うが彼は何も返さない。

「もう止めよう！お願いだから…じゃないとあなたの体が」

少女が続きを言おうとするが彼に止められてしまった。

少女は泣きながら彼を見たが、彼は相変わらず顔が見えず、何を考えているかわからなかった。

「これは俺のたんなる望み、君は後のことをお願い」

彼はそう言うつと少女の手を引き歩き始める。

彼が少女と会ったのは数十年前である。

まだ彼が狂気の魔剣士と言われ初めて間もない頃、彼がたまたま寄った村が今年の生贄に選ばれた少女を食おうと現れた神を無言で真っ二つにしたのだ。

神はいかなる攻撃も傷つかなかったはずなのに彼の持つ力により倒されたのだ。

村人は自分達の神が殺されるのを見て怒り彼を殺すために武器を持ち襲いかかるが、カウンター気味に力を使って両断していく。それを永遠と繰り返し、最後には少女と彼だけが残った。

「どうして私を…」

少女は彼に尋ねたが彼は何も答えず、そのままどこかに歩こうとしたので少女は服を引っ張り引き止めた。

「……………」

彼は無言で少女に向けて殺気を放つが、少女は服を話さなかった。

「……………なんだ」

彼は少しして諦めたのか少女に尋ねた。

「一緒に行つていい？」

「……………好きにしる」

彼がそう言うと少女は嬉しそうに付いて行く。

そして今では彼は少女には心を許し、優しく話しかけるが、多くは語らない。

少女はそれでも寄る辺になつてくれる彼に感謝をすると同時に彼の寄る辺になりたいと思ひ、色々頑張るが彼に頼りっぱなしだった。

そんなある日だ、彼の力の秘密に気付いたのは。

彼は全てのものを斬ると同時に自身も死に近づき始めているのを知った。

なぜしることが出来たかわからなかったが、その力はまるで死を体現かしたような禍々しい力であった。

「さて、この世界の神……………いや俺から言わせれば、神と言うより

化け物だな。あの糞共の命を滅ぼすか」

彼はそう言うと、少女に振り返った。

「君は俺の力の管理と世界のことを頼んだ」

彼はそう言うと、少女の手を握り二人で目の前にある国を目指す。そして彼の闘いが始まった。

闘いは一方的なのだが、どうやら相手側も馬鹿では無い。いや神であるのだから当然なのだろう。

彼の攻めてから何から何までまるで読んでいるのである。

大軍が彼の行く道行く道に現れ、そして彼はそのたびに力によって相手を倒す。

「誰か…」

少女は少し離れた所から彼の様子を見ていた。

「誰か彼を助けて……」

少女はそう願うがそれは絶対叶わない願いだとわかっていた。

だから少女は彼のために祈るだけだった。

「ようやく逢えたな…糞野郎」

彼は大軍を抜け、神のいる座にたどり着く、体には数多の傷跡があった。しかし彼は息も乱れず、後ろには何もなかったのだ。

「ふん、たかがザコがよもや、我々の同胞達を一瞬で倒すなど…」

「
神は少し怪訝そうな顔で彼を見た。
そしてあることに気が付いた。」

「そうか御主、我等が現る前よりいた原初の民の末裔か」

「ほう、知っていたのか我が祖先を」

「知りもするさ、なんせ我が全て喰らうたのだからな」

神は愉快そうに笑い彼を見た。

「そして我だけが他の神達とは違い貴様達の力を使え」

神の言葉を遮るように彼は突撃をする。

「愚かな、静止の力を発動。」

そう言うと神は彼に手を向けると彼の動きが急に止まった。

「な……に……」

「ほう、動けるのか？だが今から死ぬのじゃからな」

神がそう言うと彼に近付き殺そうとする。

そして彼の胸を腕が貫いた。

「ふん…静止空間なら攻撃されんと読んだのかの？残念じゃったの」

神がそう言つと腕を引き抜こうとした時。

「いや…読み、通りだ」

彼がそれだけ言つと彼を中心に黒い球体が現れた。

神は不思議に思ったと同時に何かヤバい気がしたのか下がろうとしたが、それよりも早く黒い球体が大きくなり神の体が触れると触れた所がまるで切り取られたかのような状態となった。

「な、なぜだ！我を殺すことなど」

神が慌てふためくと同時に彼は最期の力を振り絞り静止空間より手を振り黒い軌跡が神に向かい飛び神の体を左右に分けた。

「まだだ」

彼はそう言つと、黒い球体をさらに大きくするそして国よりも大きくなるように念じた。

国の外まで非難していた少女は黒い球体が国を包むのを見た。そして黒い球体が消えるのと同時にその球体が出来ていた場所は大きく穿っていた。

「・・・あなたの願い・・・必ず叶えます」

少女はそう泣きながら言つと、少女の姿が変わっていく。

そこにあつた始原の力を全て取り込むと同時に姿は少女は光を放つ聖女のような姿になる。

「彼の願いのために私は世界になりました」

彼女はそう言いつと歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7351s/>

斬龍黒牙の短編集

2011年10月9日00時27分発行